紀伊國献三氏は、笹川記念保健協力財団および笹川医学医療研究財団を通して、保健医療分野での国際協力・交流の推進、医療行政など幅広い活動の啓蒙を行ってきた。それはなにより国際協力・交流で、日本が担う役割の重要さを実感したからである。そこで、柔軟な視点を備えた人材の育成のため、長年に亘って関わってきた活動には、次のような「人を育てる」活動がある。

国際保健協力フィールドワークフェローシップでは、医学を志す学生たちに、国際保健協力という分野で実際にその多様なフィールドに触れ、人間の生命に関わる人との出会い、多様な現場との出会い、政府2国間協力・国際的組織での保健医療への取り組みの場を提供し、国際保健分野で活躍する次世代を育成してきた。

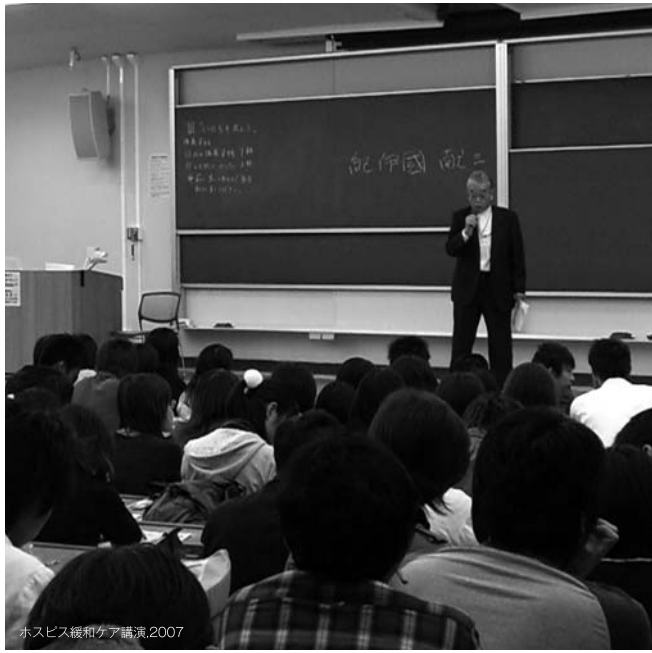
そして、1986年8月に合意された日中笹川医学奨学金制度では、中国の医学の各分野の指導的人材の育成のために、毎年100名の医師および医療専門家を中国より招聘し、日本の医学教育研究機関施設で1年間の研修機会を20年以上に亘り提供している。そして多くの研修修了者は、現在、中国の医療分野において指導者として活躍している。

また、ハンセン病技術者フェローシップ・スカラシップでは、39カ国で1120人以上の、ともすれば陽の当たらない部署であった各国ハンセン病部門の担当者に国内外での研修の機会を与え、政府の保健サービスにおけるハンセン病対策への認識を高めるとともに、各分野の専門家に技術の向上の機会を与えた。

そして、1998年から展開しているホスピス緩和ケアドクターとナースの養成事業は、笹川医学医療研究財団の中心事業として、終末期の医療のニーズに応えるために、緩和ケアの場面で的確な指導力を発揮できる医師や、高度な専門技術を備えたナースを養成する活動を行っている。

これらの活動の実現と成果において、紀伊國氏の類まれな企画・調整能力が大きく貢献していることは、いうまでもない。

■日中・笹川医学奨学金制度歓迎式典,1998


ホスピス緩和ケア講演,2007

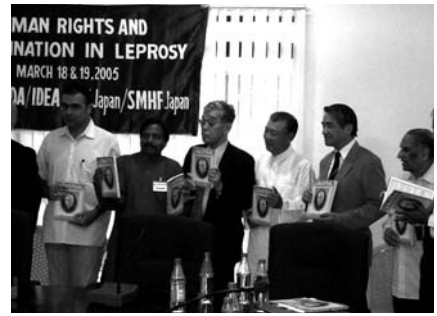
教育者部門

医療の将来を見据えた人材の育成に取り組む

紀伊國 献三（きいくに けんぞう）
財団法人笹川記念保健協力財団 理事長

病院管理学を専攻し、筑波大学、東京女子医科大学、国際医療福祉大学などにおいて教育実績を積む。中でも世界のハンセン病問題への貢献として、類まれなる企画力、調整力を活かし、民間団体を通じた国際的な保健医療分野の人材育成をはじめとし、数々のプログラムの企画、実施において大きな原動力となってきた。

推薦者 笹川 陽平 日本財団 会長



■「ハンセン病に関しての人権と差別」講演,2005